

日本の歌に生きていく力

宗教学者で上智大グリーンフケア研究所特任教授の鎌田東二さんによる講演が2日、京都市下京区の京都リサーチパークであった。「歌と宗教」歌うことそして祈ること」と題し、日本の歌の起源や信仰との関わりについて話した。

宗教学者鎌田さん 下京で講演

根本に信仰との関わり

オムロンが協賛する文化フォラムの321回目で、NHK文化センター京都支社が主催した。



歌と宗教の関わりについて講演する鎌田特任教授

(京都市下京区・京都リサーチパーク)

鎌田さんは、平安時代前期の歌人、紀貫之が古今和歌集の冒頭で記した「仮名序」を取り上げ、平仮名で表現される歌の世界観や、日本人の心に響く歌の哲学について解説した。

その上で、古事記に見られる日本神話の神が初めて歌った歌が、母を失った悲しみを源流としている点に着目。中世に花開いた文学や芸能などの根底にある鎮魂の精神に言及し、「歌は、私たちの世界にある苦しみや悲しみ、痛みを受け止め、生きていく力になる。その中にある宗教性はとても深く、歌を根本から支えている」と述べた。

(清原稔也)